

イラク戦争を米メディアはどう報道したか

前坂 俊之(静岡県立大学国際関係学部教授)

1 最初の犠牲者は真実である

1854年のクリミア戦争からベトナム戦争までの約120年間のメディアによる戦争報道の内幕を検証したジャーナリズムの名著「The First Casualty」(フィリップ・ナイトリー著『翻訳名(戦争報道の内幕)』時事通信社、1987年刊)のタイトルは「THE FIRST CASUALTY WHEN WAR COMES IS TRUTH(戦争が起これば最初の犠牲者は真実である)」。

どこの国の軍隊であれ、検閲によって、まず最初に報道の自由を血祭りにあげて、戦争を行なうのは古今東西変わらない。

英「サンデー・タイムズ」のベテラン記者・ナイトリーは従軍記者たちがきびしい検閲、プロパガンダ、真実の隠蔽、神話や美談の捏造、情報操作、愛国心などの幾多の制約をはねのけながら、どこまで戦争の真実を伝えることができたのかを検証している。戦争報道がいかに歪められてきたかも明かにして、『戦争によってメディアは発展する』『愛国心が真実への目をくもらせる』『営利主義に走り、報道の自由を守る気概と勇気に欠けたメディアは自ら死を招く』など、いくつか戦争報道の法則を指摘している。

2 FOX テレビの愛国報道が圧勝

今回のイラク戦争でもこの戦争報道の定理は成立した。イラク戦争で最も勝利を収めた米国メディアはルパード・マードックのFOXニュースである。

12年前の湾岸戦争では「これはCNNの戦争だ！」と時のブッシュ大統領に慨嘆させたほど、世界の目はCNNの戦争報道にクギづけにされたが、今回はこれまでのジャーナリズムのスタイルをかなぐり捨て「戦争支持の愛国的な放送を続けた」ニュース

専門ケーブル局「FOXニュース」が、ライバルのCNNを視聴者数で大きく引き離して圧勝した。

戦前の米ケーブルテレビの視聴率はCNN、FOX、MSNBCの順であったが、イラク戦争開戦後16日間の1日平均視聴者数では、FOXが約330万人で、CNNの265万人を約65万人も上回ってトップを占めた。(米調査会社ニールセン・メディア・リサーチの調査による)。

FOXニュースの戦争報道のタイトルは『イラクの自由』で、ロゴには星条旗をあしらうほど全面的に愛国心を掲げ、開戦第一声は『イラク解放の戦いが始まりました』であった。

今回認められた「エンベツト(埋め込み)取材」によって各部隊に同行する従軍取材のメリットをフルに発揮して、生々しい戦場からの24時間ライブ中継を流し続けた。戦車に同乗して「この巨大な軍隊がさっそうとわたっていく姿を見てください」「イラク兵は皆殺し!」とのジョークをまじえたトークで、砂埃を舞い上げて戦車が疾走する臨場感あふれる映像。感情を抑えたCNNとまるで違って、従軍リポーターもアナも声を張り上げ絶叫調で、激しいバックミュージックも流していけいけドンドン…。

これが若者や視聴者に大受けした。「善玉」が「悪玉」をやっつけるハリウッドのB級の娯楽戦争映画そのものの放送と化した。

3 ライブ中継は戦争報道のハリウッド版

バクダットのフセイン大統領宮殿では、今にもイラク兵が反撃してくるのではないかという緊迫した中を、銃で身構えた米兵が部屋を1つ1つ搜索していく手に汗握るシーン、迫力ある戦場の映像が流され、茶の間を”バーチャル戦場”に直結した。

従来のテレビメディアの戦争ナマ中継から、デジタル化し大規模となった戦争報道のハリウッド版、それもデジタル映像の驚異的なスペクトル化が茶の間を爆撃したといってもいいであろう。

「FOXは他のテレビ局がコーリション(連合軍)とか『US Troops』(米軍)というのをOur Troops(われわれの軍隊)というように愛国心を丸出しにした放送を連日繰り広げた」とANNワシントン支局・田畑正支局長はいう。

FOXなどはバクダットがほぼ陥落し、フセインの銅像が引きずりおろされた際、『暴君

は今や倒され、バクダットは解放されました』と米国のプロパガンダ(宣伝)映像を流し続けたが、イラク側の爆破され、殺され、傷ついた犠牲者や遺体、女性や子供の映像は一切流さず、戦争の悲惨さ、血の匂いは画面から消し去られた。

FOX ニュースの問題点は戦争支持よりも、イラク側の情報、被害、主張をプロパガンダとして切り捨てて、従来のジャーナリズムの客観性、中立性、公平・公正性の報道姿勢を捨て去ったことである。これでは放送は単なるプロパガンダの道具と化してしまう。

FOX はその主張でも感情的な愛国心をむき出しにしたタカ派的な発言で人気を高めた。「われわれはアメリカの勝利を望む」とキャスターが公言し、ブッシュ政権に批判的な見解をこき下ろした。

CNNの人気トーク番組「ラリー・キング・ライブ」に対抗してFOXには「オライリー・ファクター」という番組がある。ラリー・キングは両方の識者に討論させて中立的な立場を堅持しているが、ビル・オライリーは口を極めて相手を攻撃、戦争に反対している有名人を名指して「彼らの映画やCDをボイコットすべきだ」と激しく攻撃した。戦争に反対した仏、独なども槍玉に上げて、戦後の再建と復興には「国連」には関与させないと主張、「米政権のチャリダー」(ニューヨーク・タイムズ紙)ぶりを一層、際立たせた。

4月12日の戦争支持集会では『リベラルはもういない』との看板を掲げてビル・オライリーは『戦争に反対したリベラルな連中の目の玉をおしつぶしてやろうではないか』との挑発的な言辞まで吐いた。

FOXのあまりの成功は、他のテレビ局にも大きな影響を与え、メディアにおける愛国心の競争を一層過熱させた。中立・客観報道の立場にたつCNNや3大ネットワークにも脅威を与えて、ブッシュ政権批判の論調を控えさせ、報道姿勢もより愛国的なものに変えていったのである。

4 FOX効果で米メディアは総翼賛報道へ

「反戦を叫んでいる連中は国家反逆罪だ」とMSNBCは放送し、これにCNNも追従して「ニューヨーク・タイムズ」は政府と報道が一体化した現象を「FOX効果」と評した。9・11以降、国民の圧倒的な愛国心の前に反対や、批判の意見を控える報道の萎縮現象、自己規制していった米国メディアの「翼賛報道体制」がイラク戦争によって頂点に達したと言ってよいであろう。

こうした戦争の礼賛でFOXニュースはCNNを抜いてトップに躍り出て、FOXテレビも3大ネットワークABC、CBS、NBCを抜いて4大ネットワークへと発展した。米国の視聴者に圧倒的に支持されたのは、ブッシュ支持率80%という戦時下の国民の愛国的なムード、超保守化の傾向を強く反映したものである。

いうまでもなく、FOXは世界のメディア王・ルパード・マードックが率いる「ニュース・コーポレーション」のテレビである。

オーストラリアの新聞王からのし上がり、英国では「タイムズ」「サン」など、米国では「ニューヨークポスト」などの新聞、FOXテレビ、英国の衛星放送BスカイBなど、世界の新聞約80種類、11種の雑誌、テレビを持つ世界最大のメディアコングロマリッドである。

マードックは「CNNが左に偏向している」と攻撃し、FOXは保守的な立場から報道する公言、徹底した商業路線とタカ派路線を掲げて、ブッシュ政権を牛耳っている「ネオコン」の牙城ともいわれる週刊誌「ザ・ウイークリー・スタンダード」も同社が発行している。

国連で米英に逆らったフランス、ドイツを叩き、商品ボイコットの急先鋒に立ったのもこの「タイムズ」「サン」、FOXであった。

マードックの札つきの放送には驚きはしない米国の良識派もCNNがFOXに追随したことにはマユをひそめた。

4月27日放送されたテレビ朝日『サンデープロジェクト』の徹底検証番組『米国メディアが伝えたイラク戦争』がこの間の事情をよく伝えていた。

5 エンベッド取材に世界中から 600 人

戦争報道の第二の定理である「最初に血祭りに上げられるのは『報道の自由』である」という点は、『エンベッド従軍取材』を認めて世界中から記者600人が従軍するという一見公開性の高いメディアコントロールと衛星テレビ『アルジャジーラ』への激しい攻撃というアメとムチを使い分けた巧妙な情報操作の2本だてである。

国際ニュースの流れは多様化し、アラブ首長国のアブダビにある衛星ニュース「アル・アラビア」「アブダビ」も今回、国際衛星ニュースに新たに参入したが、米軍はアラブ側の視線を消し去ることにやっきとなった。

『アルジャジーラ』は湾岸諸国でいち早く「報道の自由」に踏み出したカタールで、王室などが出資して九六年に開局した。

『必ず両方から取材して、片方からのみの情報は流さない』という BBC などの欧米流の客観報道主義を掲げて、アラブ隣国の問題も取上げ、遠慮なく歯に衣着せぬ批判を展開し、各国と摩擦を引き起こしてきた。

9・11以降は「ビンラディン」の映像を伝えて、一躍世界にその知名度を上げ、『中東のCNN』とたとえられた。湾岸地域に約4500万人、ヨーロッパに約800万人の視聴者を増加するまでに急成長した。

今回のイラク戦争ではイラク国内にバグダッドに12人、バスラ、モスル、クルド人自治区などに計30人も記者を配して、さらにクウェートから記者1人が米軍の従軍取材にも参加して、イラク側から戦争の被害を複眼的に放送した。

画面の下には常時、イラク市民の死傷者数が表示され、米側の会見の際は画面を2分割して、イラクの病院内のけが人の映像を流した。

6 米の目の仇にされた『アルジャジーラ』

『アルジャジーラ』は民間人の被害、子供や女性が傷ついたり、死体の映像もそのまま流して戦争の悲惨さを伝えたが、3月23日、イラク国営テレビが流した米英軍捕虜たちへの映像を世界に伝えたところ、『ジュネーブ条約違反』として米英などから厳しい反発を招いた。

米国以外のメディアは『アルジャジーラ』の映像を大きく流したが、米国内では放映を自粛する動きが相次いだ。さらに28日には死亡した英兵二人の映像も放送するなど捕虜、戦死者の放送をめぐる批判され、ラムズフェルド国防長官は「捕虜の撮影は違反だ。イラクの宣伝だ」と激しく攻撃。

アル・ジャジーラのヒラール編集局長は「われわれは米英軍の一点ではないし、もちろんイラク政府の一部でもない。双方に起きていることを伝えるのがわれわれの使命だ」と一歩も引かなかった。(産経3月29日付)

こうした中で、ニューヨーク証券取引所は24日、捕虜の映像を流したことなども理由に『アルジャジーラ』の取材資格を剥奪し、「『民主主義と言論の自由』を朝晩、他人にお説教している米国は『アル・ジャジーラ』をたとえ歓迎しなくても、寛容であるべきだ」

とその米国のダブルスタンダードぶりを同社幹部は批判し、対立は尖鋭化していた。

バクダッドが陥落寸前の4月8日には米軍戦車が外国メディアの陣取っていたパレスチナホテルを砲撃し、ロイター通信のカメラマンら2人が死亡、3人が負傷。米軍は「カメラを銃口と見誤ったのではないか」と弁明した。

同じ日、バクダッド中心部の「アルジャジーラ」支局もミサイル攻撃を受け、記者一人が死亡した。

直後に、アラブ首長国連邦の「アブダビテレビ」の支局も米戦車の砲撃で破壊され、「アルジャジーラ」は南部のバスラでも支局の入ったホテルに爆弾を落とされており、アフガニスタン攻撃の際にも支局が米軍から爆撃されたことなどから「意図的に狙われた可能性がある」と強く反発した。

明らかに米国防総省は同メディアをターゲットにして攻撃したのである。

7 英国 BBC も米メディアを批判

英BBC放送のグレグ・ダイク会長は4月24日、ロンドン大学で講演し、米メディアの報道姿勢を「あまりに愛国的で不偏性を欠いている」と批判した。

ダイク氏は「BBCは愛国主義とジャーナリズムを混同しないようイラクで心がけた。政府に対し節を曲げない勇気をもった報道機関が米国にないこととあって、ホワイトハウス、国防総省をさらにパワフルにしている。商業主義の圧力は、他のメディアをFOXに追従させようとするが、愛国心とジャーナリズムを混同すれば米メディアの信頼性を損なうだろう」と指摘した。（「赤旗」4月28日付）。

今回、ベトナム戦争以来の従軍取材が認められた点で、メディア側には湾岸戦争の時よりましだと評価する声が出た。

しかし、今回は米軍のデジタル電子戦争化、サイバー戦争化、諜報、心理戦争の秘密作戦が大きく進み、戦争の実態が一層「ブラックボックス化」し、見えない形で行われたと同時に、巧妙なメディアコントロールで、報道によっても見えない二重の意味での『目に見えない戦争』となった。

『エンベット取材』そのものが、メディアを一見積極的に受け入れたようで、広大な戦場に点のようにばら撒き、埋め込んで、戦争の全体像を見えなくし、極小の情報を流させる情報操作、メディアの目潰しであり、これを評価するメディアは戦争報道の意味が理解できていないのではないだろうか。

8 戦争報道はコンテキストが大切

戦争報道で大切なのは視聴者がニュースを理解できるコンテキスト(文脈)を提供することで、情報の丸投げであってはならない。点としてばら撒かれたカメラからの情報のライブ中継(タレ流し)は映像の丸投げ、ノイズ(雑音)そのもので、砂漠の砂嵐のように戦争の真実を見えなくするだけだ。

巧妙なメディアコントロールや検閲を打ち破って取材力して戦争の本質に迫り、その実態を検証することこそコンテキストの提供になるが、そのためには両方から取材すること、軍事的な知識、専門性、分析能力、総合性に支えられたジャーナリズムのアジェンダセッティング(議題設定機能)、編集機能こそが求められる。それはFOXやそれに追随した米メディアではなく、伝統的な客観ジャーナリズムの側にある。

皮肉なことに米国民主義の原点といってよい『米メディアの報道の自由を保証する』と高らかに謳った米国第一次修正憲法は1771年に制定され、それからちょうど二百周年に当たる一九九一年に湾岸戦争が起こった。

修正憲法は「政府批判を行っても罪に問われることは、永久にありえない」として米メディアに政府を厳しく監視する『ウオッチドッグ』の役割を求めたのである。ところが、「湾岸戦争では『ウオッチドッグ』どころか、国防総省に可愛がられる『ペットドッグ』以下の存在となった」とベトナム戦争当時の元米司法長官・ラムゼー・クラークは批判している。

「なぜなら、メディアは湾岸戦争のチアリーダー(応援団長)になったからだ。テレビ報道は、ニュース報道というよりも、まさに戦争、兵器システム、軍国主義を宣伝する長時間にわたるコマーシャルそのものだった」とクラーク元長官は指摘した。(同著「ラムゼー・クラークの湾岸戦争 戦争はこうして作られる」地湧社1994年8月刊)。

イラク戦争ではこの報道の姿勢は変わったのであろうか。残念ながら、さらに、ひどくなっているのである。

戦争報道の第2の定理通り、米メディアは米政府のメディアコントロールに完全に敗北したといってよいだろう。

『ハーバース・マガジン編集長』・ジョン・マーカーサー氏は次の対北朝鮮戦争について不気味な予言をしたのである。

『勝利に酔いしれて米政府がイラク戦争で犠牲者が少なくすんだとおもわせると影響は重大だ。アメリカのメディアが次のバカげた戦争を簡単に始めさせることができるからだ』(4月27日放映・テレビ朝日『サンデープロジェクト』徹底検証番組『米国メディアが伝えたイラク戦争』より)。

(イラク戦争報道(下)につづく)